



## 2023年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

### 今後の見通し(2024年1月~6月)のポイント

#### 海況

黒潮はA型<sup>(※1)</sup>基調で推移する。

沿岸水温は、潮岬以西は「**平年並**」<sup>(※2)</sup>~「**高め**」<sup>(※2)</sup>、熊野灘~遠州灘~相模湾は「**平年並**」~「**高め**」で暖水波及時に「**極めて高め**」<sup>(※2)</sup>、伊豆諸島海域は概ね「**やや高め**」~「**極めて高め**」で八丈島周辺では一時的に「**やや低め**」~「**平年並**」、房総~常磐南部海域は「**平年並**」~「**高め**」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、

やや高め・やや低め=平年値±1.0℃程度。

高め=平年値+1.5℃程度、極めて高め=平年値+2.5℃以上、

ただし、鹿島灘~常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

#### 漁況(来遊量予測)

##### マイワシ

房総以北では前年並~下回り、相模湾以西では前年並となる海域が多い。

##### カタクチイワシ

引き続き低水準で、紀伊水道外域以西では前年を下回る海域が多く、熊野灘以東では前年並の海域が多い。

##### ウルメイワシ

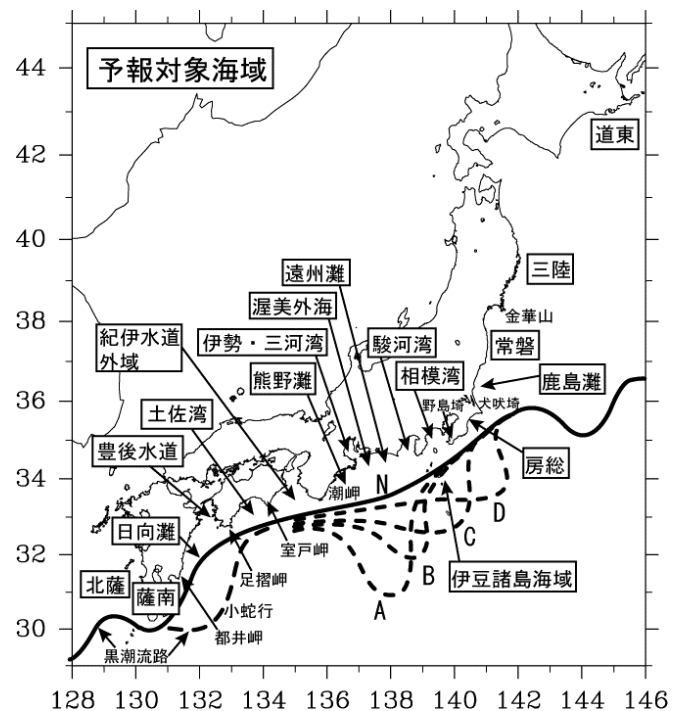
全体として前年を上回る。

##### マアジ

相模湾では前年を上回り、熊野灘以西では前年並~下回る海域が多い。

##### マサバ・ゴマサバ

マサバは低調であった前年並、  
ゴマサバは低水準。



### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 企画調整部門(横浜) 上原

漁況：浮魚資源部(横浜) 福若、由上、安田、上村、井元、渡部、木下

海況：海洋環境部(横浜) 栗田、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

# 中央ブロック海況予報

## 今後の見通し（2024年1月～6月）

### (1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

#### ◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、1月から3月にかけて離岸傾向で推移し、その後接岸傾向で推移する。
- ・足摺岬沖では、接岸傾向で推移するものの、一時的に離岸することがある。
- ・室戸岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移するものの、一時的に接岸することがある。

#### ◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・蛇行北上部は、概ね伊豆諸島海域の西側に位置する。
- ・房総沖では、接岸傾向で推移するものの、一時的に離岸することがある。

### (2) 薩南～房総海域

- ・都井岬～足摺岬沖は、概ね黒潮系暖水に覆われる。
- ・室戸岬～潮岬沖は、一時的に黒潮から暖水が波及することがある。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。
- ・房総沖では、黒潮からの暖水に覆われやすい。

### (3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮から暖水が波及しやすい。

### (4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、概ね「やや高め」～「極めて高め」で推移するが、八丈島周辺では一時的に「やや低め」～「平年並」となることがある
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、  
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上  
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、  
（高め、低め）＝平年値±4.0～6.0℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

## 経過（2023年7月～2023年12月）（注：経過は図2を参照のこと）

### (1) 黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が継続した。
- ・ 8月中旬～9月中旬にかけて、小蛇行の東進に伴い都井岬～足摺岬沖で一時的に接岸した。
- ・ 7月上旬～10月にかけて、蛇行北上部が遠州灘沖でS字状となることがあり、黒潮屈曲部が熊野灘～遠州灘に接近した。
- ・ 房総沖では、9月中旬に沖合冷水渦の結合により一時的に離岸した。

### (2) 薩南～房総海域

#### ◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、7月～10月は「平均的な位置」、11月は「離岸」で推移した。

#### ◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、7月～10月は概ね離岸傾向、11月～12月は概ね接岸傾向で推移した。
- ・ 足摺岬沖では、8月下旬～9月上旬は「接岸」、9月下旬～10月上旬に「かなり離岸」、10月中旬～下旬には「接岸」、11月は「接岸」～「やや離岸」で推移した。
- ・ 室戸岬沖では、概ね「かなり離岸」～「著しく離岸」で推移したが、9月下旬～10月下旬にかけて一時的に「やや離岸」となった。
- ・ 紀伊水道外域では、期間を通じて概ね離岸で推移したが、黒潮北縁から暖水の影響がみられた。

#### ◎潮岬以東

- ・ 7月～10月にかけてS字状となった蛇行北上部が繰り返し熊野灘～遠州灘に接近し、黒潮系暖水が頻繁に波及した。
- ・ 駿河湾、大島西水道へ向けて断続的に暖水が波及した。
- ・ 7月上旬～中旬にかけて、黒潮は八丈島付近を概ね東向きに流れ、以降は概ね三宅島～御蔵島付近を北東～東向きに流れた。
- ・ 野島埼沖の黒潮は概ね接岸傾向で推移したが、7月中旬と9月中旬に一時的に離岸した。

### (3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響が断続的にみられた。

## 現況 (2023年12月18日現在)

### (1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 室戸岬沖から大きく離岸した後、遠州灘沖で  $30.5^{\circ}\text{N}$  付近まで南下し、石廊崎沖に北上した後、御蔵島～八丈島間から北東へ流れている。

### (2) 薩南～房総海域

#### ◎ 潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「やや離岸」、足摺岬沖で「接岸」、室戸岬～潮岬沖で「かなり離岸」～「著しく離岸」している。

#### ◎ 潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘沖に、黒潮系暖水がみられる。
- ・ 伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。

### (3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響がみられる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

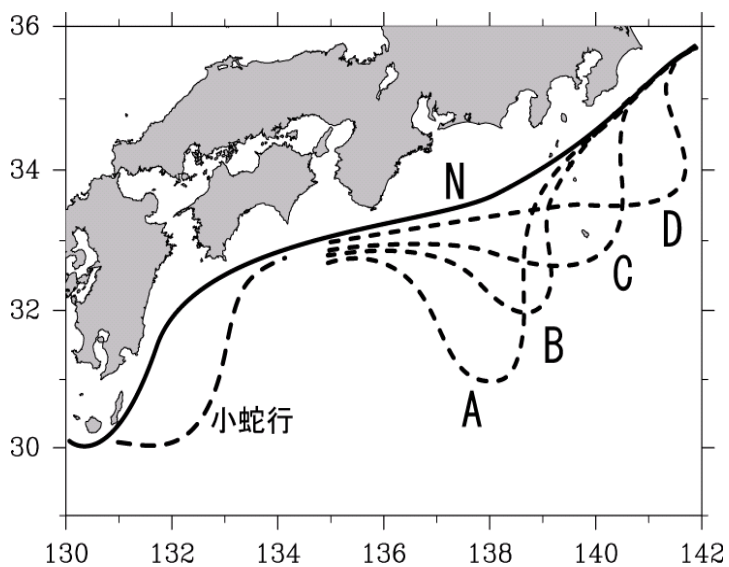


図1 黒潮流型の分類

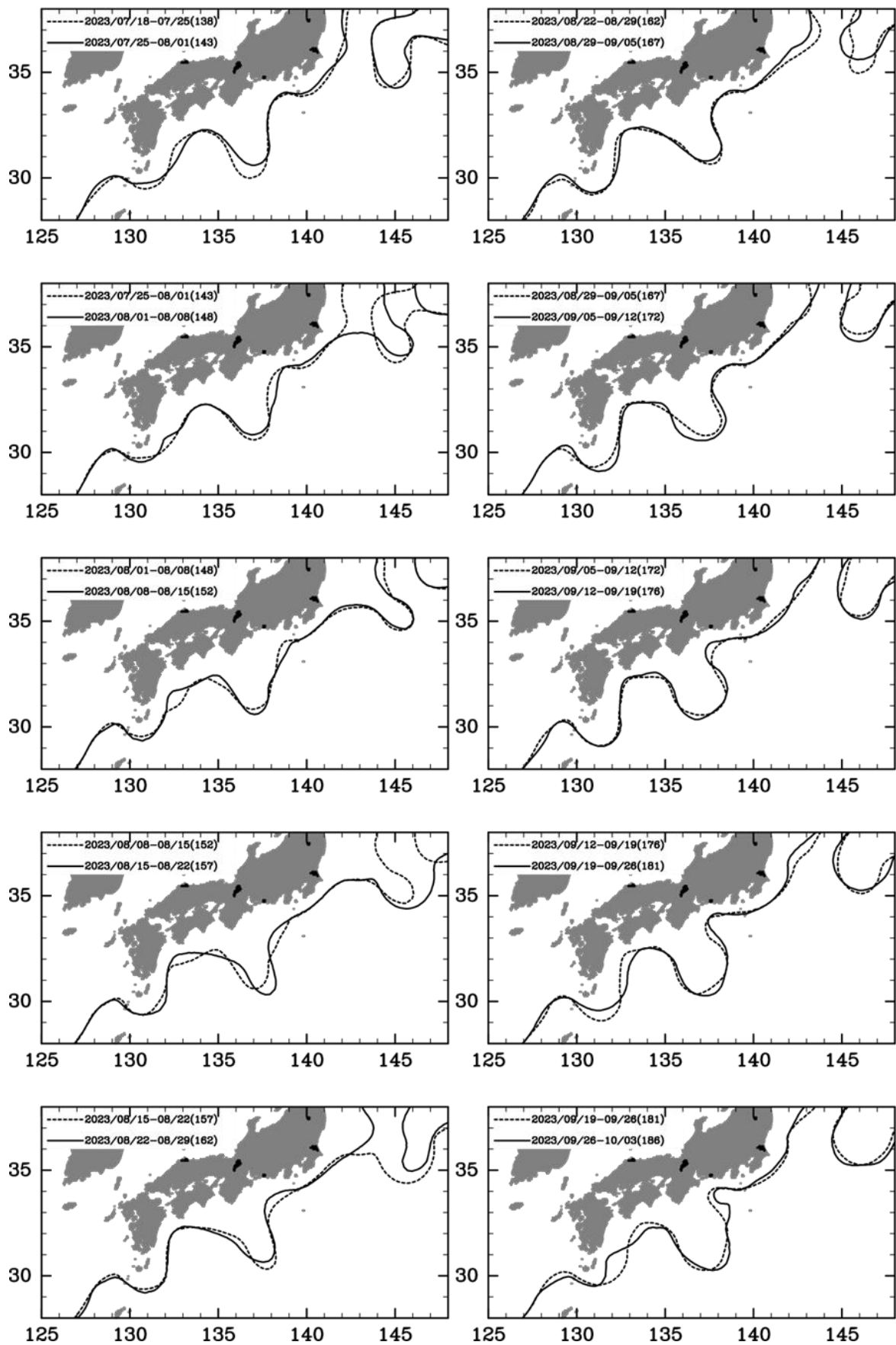


図2 黒潮流軸のパターン

(2023年8月~2023年9月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

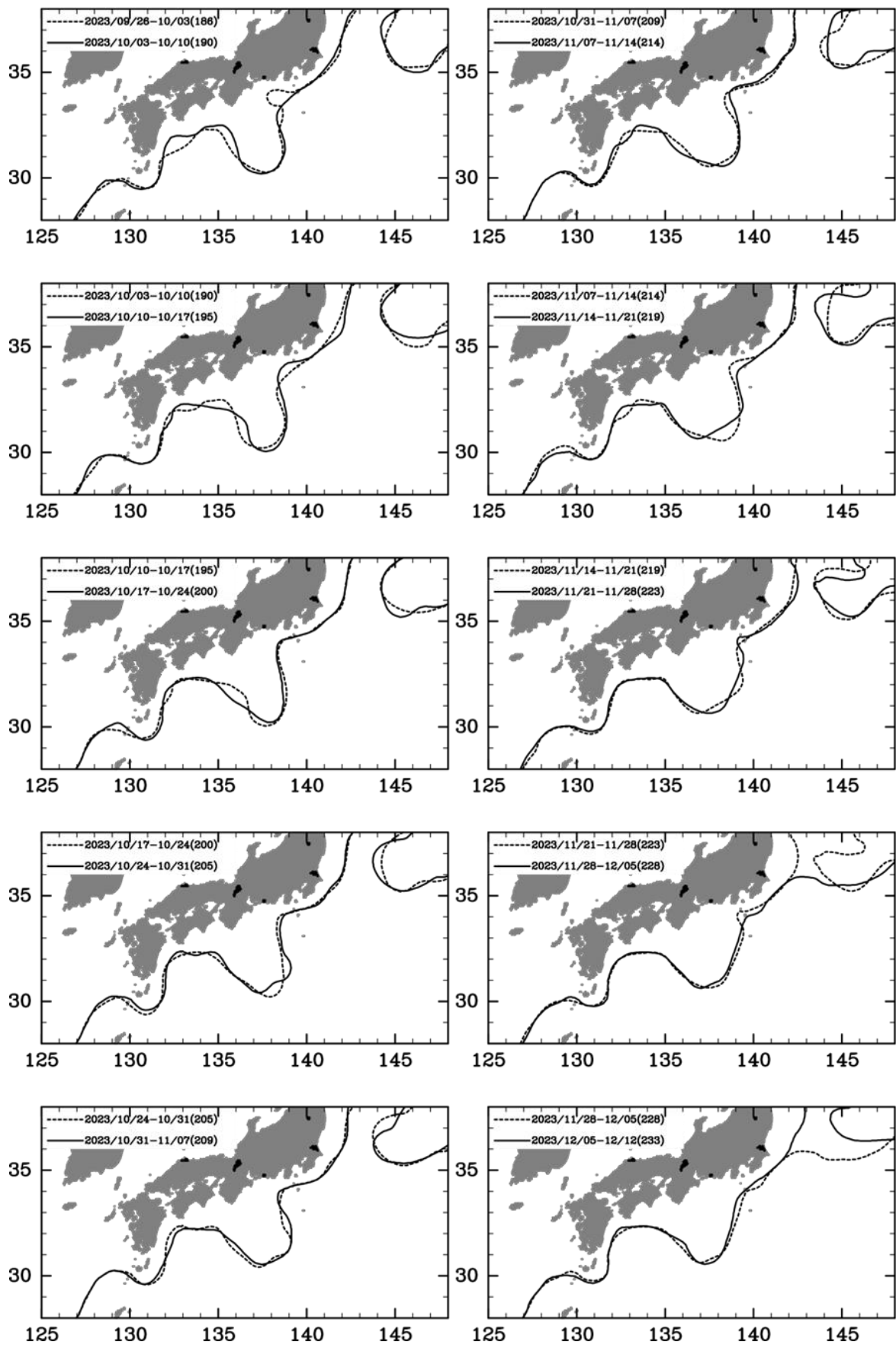


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2023年10月~2023年12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

## マイワシ太平洋系群等の漁況予報

### 今後の見通し（2024年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船びき網

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）、4歳（2020年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

#### 1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道南部東側～宿毛湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年並～下回る。紀伊水道外域東部では前年並。熊野灘では低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15 cm～20 cm前後（1歳以上）、期後半は7 cm～12 cm前後（0歳魚）主体。豊後水道南部東側では、5 cm～10 cm前後（0歳魚）主体。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm未満（0歳魚）および14 cm以上（1歳以上）が漁獲される。熊野灘では14 cm以上（1歳以上）主体。

#### 2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船びき網）

(1) 来遊量：駿河湾、相模湾西部では前年並～上回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期：伊勢・三河湾、渥美外海では操業が見込まれない。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：駿河湾、相模湾西部では、期前半は15 cm～20 cm前後（1歳魚～3歳魚）、期後半は12 cm以下（0歳魚）主体。相模湾東部では10 cm以上（1歳魚）主体。

#### 3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月～5月は犬吠埼沖～常磐海域で形成され、5月下旬以降は三陸海域、6月下旬には道東海域にも形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm～16 cm前後（1歳魚）、13 cm～19 cm前後（2歳魚）、16 cm～20 cm前後（3歳魚）、17 cm以上（4歳魚）。

### 漁況の経過（2023年7月～11月）および見通し（2024年1月～6月）についての説明

#### 1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。そ

の後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2022年は491万トンと推定された(2023年度資源評価)。

2020年級群(4歳)以上は、最近10年(以下、近年)において高い加入量の年級群で構成されている。2023年における3歳以上としての漁獲状況は前年並であった。4歳以上の推定残存資源量は前年を上回る。

2021年級群(3歳魚)は、加入量が689億尾と推定されており、2020年級群と同程度の加入水準となっている。2023年における2歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2021年級群の推定残存資源量は、2020年級群の同時期を下回っている。

2022年級群(2歳魚)は、加入量が582億尾と推定されており、2021年級群と同程度の加入水準となっている。2023年における1歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2022年級群の推定残存資源量は、2021年級群の同時期と同程度である。

2023年級群(1歳魚)は、2023年における0歳魚としての漁獲状況(主に西日本海域)は、前年を上回っている。一方で、沖合域においては、5月~6月の移行域幼稚魚調査(水産資源研究所)において前年を下回るCPUE(Catch Per Unit Effort: 単位努力量当たり漁獲量)が見られ、直近の9月~10月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査(水産資源研究所)に基づく加入量指数は前年を下回った。また、6月~7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査(水産資源研究所)においては、前年を下回るCPUEとなっている。現時点では不確実であるが、近年は沖合回遊群が資源の中心であることを踏まえ、2023年級群の加入量は前年を下回る水準と考えられる。

2024年級群(0歳魚)については、現時点ではその水準を予測できない。

## 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

### (1) 北薩~熊野灘(まき網、定置網)

北薩~熊野灘での7月~11月の漁獲量は9.3千トンと前年同期(0.8千トン)を大きく上回った。北薩~豊後水道南部西側および宿毛湾~土佐湾で前年を大きく上回る漁獲となっていた。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

・来遊量: 北薩、薩南海域では、1月~4月は1歳魚~2歳魚(2023年級群~2022年級群)が、5月以降は0歳魚(2024年級群)が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる1歳魚~2歳魚の漁獲状況が好調に推移していることから、来遊量は好調であった前年並と予測される。

日向灘では、5月まで1歳以上、6月は0歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる1歳以上の漁獲量の予測値(三重県・高知県・鹿児島県の直近のまき網漁獲量に基づく)は、現時点で前年と同程度であるため、今期の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、3月までは1歳魚および2歳魚、4月以降0歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる2023年級群の漁獲状況は前年を大きく上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道中南部東側では、0歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲状況が前年を下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0歳魚および1歳以上が漁獲される。今期の漁獲の主体となる2023年級群の漁獲



状況は、まき網、定置網ともに低調に推移していることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。本海域においては年間を通じて成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況からの来遊量の予測は難しいが、近年の漁獲傾向から、来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳以上および0歳魚が漁獲される。本海域において、1そうまき網は2017年以降、定置網は2016年以降、低調に推移している。また、潮岬沖での黒潮の離岸傾向が継続した場合、マイワシ漁場の形成条件は悪いと考えられる。以上より、来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。太平洋系群の資源量は増加しているが、前期と同様に黒潮が石廊崎に接岸すると本海域への産卵親魚の来遊は少なくなることが予測される。また、沿岸域の1歳魚および2歳魚については、秋季にまとまった漁獲が見られていない。以上より、全体としての来遊量は低水準と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15 cm～20 cm前後の1歳以上、期後半は7 cm～12 cm前後の0歳魚が主体となる。豊後水道南部東側では、5 cm～10 cm前後の0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm未満の0歳魚および14 cm以上の1歳以上が漁獲される。熊野灘では14 cm以上の1歳以上が漁獲される。

## (2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船びき網）

伊勢・三河湾～相模湾での7月～11月の漁獲量は、4.8千トンと前年同期（3.2千トン）を上回った。伊勢・三河湾および駿河湾、相模湾西部では前年を上回る漁獲となった。相模湾東部では前年を下回る漁獲となった。

- ・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、今期の操業はなく、前年同様に魚体の大型化を図り7月以降の操業となる。

駿河湾、相模湾西部では、期前半は1歳魚～3歳魚（2023年級群～2021年級群）が主体となり、期後半は0歳魚が主体となる。今期は、南下回遊する産卵親魚が主に漁獲されることが考えられる。マイワシ太平洋系群の親魚量は前年並であり、親魚量と漁獲量との関係から前年を上回る来遊が期待されるが、石廊崎に黒潮が接岸した場合は産卵親魚の回遊が妨げられることも考えられる。以上より、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

相模湾東部では、黒潮大蛇行が収束する見通しがなく、暖水波及によりマイワシの来遊が妨げられることが考えられるため、今期の来遊水準は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：伊勢・三河湾、渥美外海は7月以降。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、駿河湾、相模湾西部では、期前半は15 cm～20 cm前後の1歳魚～3歳魚が主体となり、期後半は12 cm以下の0歳魚が主体となる。相模湾東部では10 cm以上の1歳以上が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

道東海域のまき網漁業は、6月下旬から10月まで操業が行われ、漁獲量は25.0万トンと前年同期（22.5万トン）並であった。房総～三陸海域のまき網漁業の7月～11月の漁獲量は、1.0万トンと前年同期（3.4万トン）を大きく下回った。房総以北の定置網等は、7月～11月の漁獲量は1.2万トンと前年同期（1.7万トン）を下回った。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）および4歳（2020年級群）以上となる。

資源状態を反映し、2歳以上の来遊量は前年並の高水準になると考えられる。1歳魚の来遊量は、現時点では不確実であるが、沖合域での調査結果から前年を下回ると考えられる。また、黒潮続流が三陸海域において北偏・接岸していることから魚群の南下が遅れており、少なくとも1月までは北偏・接岸が継続することが予測されている。以上より、全体としての来遊量は前年並～下回ると予測される。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。

・漁期・漁場：まき網の漁場は、1月～5月は犬吠埼沖～常磐海域で形成される。5月下旬以降は犬吠埼沖～三陸海域、6月下旬には道東海域にも漁場が形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて漁獲される。

・魚体：近年および直近の出現状況から、1歳魚は10 cm～16 cm前後、2歳魚は13 cm～19 cm前後、3歳魚は16 cm～20 cm前後、4歳以上は17 cm以上。まき網では、1月は3歳以上、2月以降は2歳以上が主体となり、6月は1歳魚も混じる。定置網では、1歳魚～3歳魚を主体に4歳以上も混じる。

## カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

### 今後の見通し（2024年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

#### 1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を上回る。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道東側では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年並。紀伊水道外域西部では前年並～下回る。紀伊水道外域東部ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm未満の0歳魚、1歳魚主体。

#### 2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海、駿河湾ではほとんど漁獲されない。熊野灘、相模湾では前年並。

(2) 漁期・漁場：熊野灘、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：8 cm～12 cmの1歳魚主体。

#### 3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では1月～3月は前年並だが、4月～6月は予測困難。三陸南部海域では前年を上回る。常磐海域、三陸北部海域ではまとまった漁獲がない。道東海域では主たる漁獲対象とならない。

(2) 漁期・漁場：房総海域の2そうまき網により1月～3月に期を通じて漁獲されるが、4月～6月は現時点では予測が困難。三陸南部海域の定置網により2月までと5月以降に漁獲される。常磐～房総海域の1そうまき網による主な漁獲対象にはならない。

(3) 魚体：7 cm～11 cmの1歳魚を主体に、9 cm～13 cmの2歳魚、12 cm～14 cmの3歳魚が漁獲される。

### 漁況の経過（2023年7月～11月）および見通し（2024年1月～6月）についての説明

#### 1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、令和5（2023）年度資源評価において、2002年の291万トンにピークに減少傾向に転じ、2018年に9.5万トンの最小値となった後、増加に転じて2022年は24.7万トンと推定された。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

令和5年度資源評価に基づくと、2021年級群（3歳魚）の加入量は466億尾と推定された。

2022年級群（2歳魚）の加入量は215億尾と推定され、2021年級群の加入量を下回った。水産資源研究所が実施している沖合域の調査船調査では、2023年6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以降、北上期調査）において推定1歳以上のCPUE（全測点の平均CPUEで速報値。以下同様）は前年を上回

ったものの低水準であった。一方、2023年9月～10月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（以降、秋季調査）における推定1歳以上のCPUEは前年を下回ったが、同時期に釧路水産試験場が道東沖で実施した調査船調査結果によると体長12 cm以上の大型のカタクチイワシが漁獲物の大半を占めた。

2023年級群（1歳魚）は、主産卵場である東海海域を中心に7月～11月にシラスや0歳魚として漁獲され、2023年における同期間の漁獲量は前年並であった。2023年の北上期調査における推定0歳魚CPUEは前年を上回ったが低水準であった。これらのことから、2023年級群は2022年級群と同程度の低い加入であると推測される。

2024年級群（0歳魚）は、現時点でその水準を予測することは難しい。

## 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

### (1) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、1月～3月に漁獲の主体となる1歳魚（2023年級群）は、前期（7月～11月）の漁獲量が前年を上回って推移していることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、近年、沿岸発生群が漁獲の主体となっている。2023年秋季のシラスの漁獲、及び周辺海域のシラス漁獲量が低調であることから、来遊量は前年を下回ると予測される。中型まき網による漁獲が本格化する6月の来遊量は現段階では予測が困難である。

豊後水道南部西側では、1歳魚と0歳魚（2024年級群）が漁獲の主体となる。4月以降に漁獲される0歳魚の来遊量は現段階では不明だが、2023年級群が水揚げの主体であった2023年7月～11月のまき網水揚量が前年を上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道東側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2023年5月以降のカタクチイワシのシラス水揚量が前年を下回っていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、期を通じて0歳魚、1歳以上が漁獲の対象となる。近年の宿毛湾の中型まき網の水揚量は、上半期、下半期とも減少傾向であることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域西部では、年間を通じて成魚を漁獲対象とする漁業が少ないため漁況から来遊水準を判断することは難しいが、近年の漁獲傾向及び黒潮の離岸状況から、来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、予測が困難である。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。
- ・魚体：12 cm未満の0、1歳魚が主体。

### (2) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、冬季に来遊する魚群は前年夏秋季の漁獲対象とは異なり、黒潮親潮移行域から大規模回遊を行う群と考えられ、漁獲動向も前年夏秋季とは連動しない。2023年の北上期調査によると、推定1歳以上（2022年級群以上）のCPUEは低水準であった前年を上回っており、千葉県では2023年3月～9月まで1歳魚主体に漁獲が好調であった。そのため、熊野灘では2023年2月のようにサバ類やマイワシの産卵回遊群の来遊が無く、カタクチイワシの産卵回遊群の来遊があった場合は漁業の主対象種となり、ややまとまって漁獲される可能性があることから、来遊量は前年並と予測される。

三河湾では漁場が形成されない。伊勢湾、渥美外海では、1月～3月に散発的に漁場が形成されるが、カタクチイワシ太平洋系群の資源量は低水準と評価されているため来遊量は少ないと考えられ、現時点では予測が困難である。

駿河湾ではほとんど漁獲されない。相模湾西部では、近年は定置網で僅かに漁獲される程度である。漁獲対象となる1歳魚（2023年級群）の資源水準は、前年に引き続き低水準と推測されることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、黒潮A型流路が継続している2018年以降、主要定置網の漁獲量は数トンのレベルに留まっている（秋季に一時的にB型となった2020年を除く）。JCOPE2Mによる黒潮長期予測（12月6日発表）によると、大蛇行は少なくとも2月まで継続すると予測されており、近年同様の不漁傾向が継続すると考えられる。これらのことから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。
- ・魚体：8 cm～12 cmの1歳魚主体。

### (3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、1歳魚（2023年級群）主体に2歳魚（2022年級群）が混じる。1歳魚は、房総海域に前年秋季に0歳魚として来遊し同海域で成長する群と、三陸海域以北から南下してくる群が1月～3月の漁獲対象となると考えられる。2023年10月、11月における、房総沿岸の2そうまき網の漁獲量は前年を上回っているものの低調であり、2023年秋季に房総海域に来遊した群は少なかったと考えられる。また、同時期の三陸南部海域における定置網の0歳魚漁獲量は、前年よりは多いが低調であるとの情報から、1月～3月における三陸海域以北からの来遊量も少ないと考えられる。これらのことから、来遊量は低調な前年並と予測される。2歳魚は、2023年に道東沖で行われた9月浮魚類分布調査（釧路水産試験場）において、資源量全体が低水準な近年の中では12 cm台の大型成魚の分布量が多いことが確認されており、2022年級群以上が主体であると考えられる。ただし、FRA-ROMSIIによると房総海域沿岸の水温は1月下旬まで16° C～18° C前後で推移すると予測されている。このため、房総海域において高い沿岸水温が予測期間を通して続く場合、三陸海域以北から南下する群は少ないと考えられる。そのため、来遊量は低調であった前年並と予測される。4月～6月の来遊量は現時点では予測が困難である。

常磐海域では、冬季から春季に漁獲されるカタクチイワシは、主に体長12 cm～13 cmの大型成魚（明け2歳魚）と体長9 cm～11 cmの小型成魚（明け1歳魚）で構成される。沖合回遊群の資源量は増加傾向にあると考えられるが、1そうまき網は周年を通してサバ類やマイワシを狙うためカタクチイワシは漁獲対象とはなりにくいため、2そうまき網による漁獲が主体となる。来遊量は、前年並と予測されるが、まとまった漁獲はない。

三陸南部～仙台湾では、釧路水産試験場が2023年に道東沖で行った9月浮魚類分布調査において12 cm台のカタクチイワシがまとめて採集されていること、2023年12月の宮城県定置網で南下群と思われる12 cm～13 cm台のカタクチイワシを漁獲していることなどから、1月に2歳魚および3歳魚（2021年級群）を主体とした沖合回遊群が本格的に南下し、今期は親潮の勢力が弱く、黒潮統流の北偏が継続し、前年と同様に海水温が高く推移すると予測されるため、2月まで漁獲が続くことから、来遊量は前年を上回ると予測

される。定置網の初漁期となる5月以降には北上群が獲れ始め、前年並の漁獲になると考えられる。これらのことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

三陸北部海域では、漁業情報から判断して、まとまった漁獲がない。

道東海域では、2021年以降の釧路水産試験場の調査船調査結果から、当海域におけるカタクチイワシの来遊量が増加傾向にあると考えられるため、予測対象期間内に道東海域に来遊する可能性がある。しかし、予測対象期間内に操業する沿岸漁業やまき網漁業では、マイワシを中心とした漁獲が行われると考えられるため、本種を対象とした漁獲が行われる可能性は低い。これらのことから、来遊量の予測は困難である。

・漁期・漁場：房総海域では1月～3月に2そうまき網により漁期を通じて漁獲されるが、4月～6月は現時点では予測が困難。三陸南部海域では2月までと5月以降に定置網により漁獲される。資源量が多い年には、12月以降に1そうまき網の漁場が常磐～房総海域に形成されていたが、近年は主な漁獲対象にはなっていない。

・魚体：7 cm～11 cmの1歳魚を主体に、9 cm～13 cmの2歳魚、12 cm～14 cmの3歳魚が漁獲される。

## ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

### 今後の見通し（2024年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳（2023年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域および日向灘～豊後水道南部では前年を上回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域では前年並～下回る。熊野灘では前年を上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：前半は1歳魚（15 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（10 cm以下）が加入する。

### 漁況経過（2023年7月～11月）および見通し（2024年1月～6月）についての説明

#### 1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降は減少し、2018年以降は概ね3万トン以下で推移している。2022年の値は2.2万トンで、2021年（3.9万トン）より減少した。卵稚仔調査で得られる卵密度データを標準化した資源量指標値（平均値を1とする相対値）は、2016年に1.92と過去最高となり、2017年～2019年は1.39～1.62と比較的高い水準で推移した。しかし、2022年は0.47と大きく減少した。これらのことから、令和5(2023)年度の資源評価においては、資源は減少傾向にあると判断されている。

#### 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本予測期間（2024年1月～6月）は、前半は1歳魚（2023年級群）主体の漁況になると推測されるため、2023年後半期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。後半には0歳魚（2024年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予報対象海域である鹿児島県～三重県における2023年1月～11月の主要港水揚量は26,073トンと前年同期（21,835トン）並みであった。予測対象海域の主要港における前半期（1月～6月）水揚量と後半期（8月～12月）水揚量には正の相関関係がある。後半期（7月～11月）水揚量と翌年前半期（1月～6月）水揚量にも、弱いながらも統計的に有意な正の相関関係がある。2000年～2022年の後半期（7月～11月）水揚量と翌年前半期（1月～6月）水揚量との関係を用いて、2023年7月～11月の水揚量（22千トン）から予測した2024年前半期（1月～6月）の水揚量は9.2千トンであった。これは2023年同期水揚量（5.2千トン）の178%に相当する。この関係に基づくと、2024年前半期（1月～6月）の来遊量は前年を上回ると予測される。

北薩および薩南海域では、1月～4月の漁獲の主体は1歳以上（2023年級群以上、15 cm～20 cm）で、5月～6月の主体は0歳魚（2024年級群、7 cm～10 cm）となる。1月～4月に漁獲の主体となる1歳以上（2023年級群以上）の漁獲量が前年を上回って推移していることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、1月～4月は1歳以上（2023年級群以上、15 cm～20 cm以上）、6月以降は0歳魚（2024年級群）が主体となる。1月～4月に主体となる1歳以上（2023年級群以上）の漁況は、鹿児島県主要4港の前年10月～12月の漁況と関係性がみられている。2023年11月時点で鹿児島県漁獲量から求めた予測値は前年の宮崎県の漁獲量を上回っていることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1月～3月は1歳魚（2023年級群、15 cm～20 cm）、4月～6月は0歳魚（2024年級群、10 cm前後）が主体となる。2023年7月～11月の漁獲の主体は2023年級群であり、2024年はこれらの個体が1歳魚となり漁獲される可能性がある。2023年7月～11月のまき網水揚量が前年を上回ったため、来遊水準は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部東側では、主漁期となる4月～6月に0歳魚（2024年級群、5 cm～10 cm）が漁獲の主体となる。これらの個体の産卵親魚になり得る2023年7月～11月の0歳魚（2023年級群）が前年同期を上回っていることから、来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、宿毛湾中型まき網が漁獲の中心である。宿毛湾中型まき網における1月～6月の水揚量と8月～12月期の水揚量には有意な正の相関がみられ、関係式から予測される2024年1月～6月の水揚量は2,196.0トンと前年（1,344.1トン）より多いことから、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、年間を通じて成魚を漁獲対象とする漁業が少ないため、漁況から来遊水準を判断することが難しいが、近年の漁獲傾向及び黒潮の離岸状況から、前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1そうまき網および棒受網による漁獲量は2016年以降減少している。熊野灘南部における定置網および潮岬周辺における棒受網による漁獲量は、総じて減少傾向である。また、黒潮が潮岬で離岸のまま推移した場合、ウルメイワシの漁場形成条件は悪いと考えられる。これらのことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では明け1歳魚（2023年級群、15 cm～20 cm）および2歳以上（2022年級群以上、20 cm以上）が主体となる。近年の熊野灘では冬春季の成魚は期間、量ともに減少傾向が著しく、前年1月～2月には体長20 cm～22 cmの推定2歳以上が漁獲主体となった。今期の2歳以上の来遊量は、近年の漁況から、前年並～上回ると予測される。また、明け1歳魚は、前期（7月～11月）の漁況から前年を上回ると判断される。以上から、来遊量は前年を上回ると予測される。なお、熊野灘ではサバ類など他に優先的に獲るものがあればウルメイワシは積極的に漁獲されないため、漁獲が来遊を反映しない可能性もある。



## マアジ太平洋系群等の漁況予報

### 今後の見通し（2024年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、  
2歳魚（2022年級群）、3歳（2021年級群）以上。  
年初に加齢、魚体は尾叉長。

#### 1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

- （1）来遊量：北薩～薩南海域では前年並。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年を下回る。豊後水道東側では前年並～上回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。
- （2）魚体：北薩～薩南海域では1歳魚、2歳魚主体、日向灘、豊後水道南部西側では1歳魚が主体、豊後水道東側では0歳魚が主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は14 cm以下、1歳魚は14 cm～20 cm、2歳以上は20 cm以上。

#### 2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

- （1）来遊量：紀伊水道外域西部では前年並～上回る。紀伊水道外域東部では前年並。熊野灘では前年並～下回る。
- （2）魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚主体、紀伊水道外域東部では1歳魚～4歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は12 cm以下、1歳魚は12 cm～21 cm、2歳以上は21 cm以上。

#### 3. 相模湾（定置網）

- （1）来遊量：伊豆東岸、西湘地区ともに前年を上回る。
- （2）魚体：主体となる1歳魚は16 cm～22 cm。

### 漁況の経過（2023年7月～11月）および見通し（2024年1月～6月）についての説明

#### 1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降は減少傾向に転じ、2015年には4.4万トンまで減少した。その後は横ばい傾向を示している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.2億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和5年度（2023年度）資源評価において、2022年の資源量は5.6万トン、親魚量は2.6万トンと推定された。

2021年級群（3歳魚）の加入量は3.9億尾と推定され、2022年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2022年級群（2歳魚）の加入量は6.5億尾と推定された。2023年前半の漁獲の主体となったが、2023年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2023年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。現状での各県地先の加入量の指標値は、宿毛湾まき網ゼンゴ CPUE（4月～11月）、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量（4月～11月）、千葉県定置網当歳魚漁獲量（10月～11月）では前年を上回っているが、宮崎県南部定置網アジ仔 CPUE（4月～6月）、宇和島港まき網ゼンゴ CPUE（4月～11月）、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（4月～11月）は前年を下回っている。4月～11月の指標値の相乗平均は2022年級群を上回ることから、2023年級群の加入量は2022年級群を上回ると考えられる。

2024年級群（0歳魚）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点での予測は困難である。

## 2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2024年級群）：14 cm以下、1歳魚（2023年級群）：15 cm～20 cm、2歳魚（2022年級群）：21 cm～24 cm、3歳（2021年級群）以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾叉長20 cm台に3歳から10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。

### (1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚、2歳魚（2023年級群、2022年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年11月の漁獲量と正の関係が認められることから、今期の漁獲量は前年並と予測される。

日向灘では、1歳魚が漁獲の主体となる。日向灘のまき網は、前年7月～12月漁獲量と高知県（宿毛湾）前年7月～11月まき網漁獲量の相乗平均値により漁獲動向を判断している。11月までの予測値が前年の宮崎県の漁獲量を下回ることから、日向灘における2024年1月～6月の漁獲量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2024年は2023年7月～11月に水揚げされた2023年級群（0歳魚）が1歳魚となり漁獲される可能性がある。マジ太平洋系群の資源量は低水準で推移しており、2023年級群が水揚げの主体であった2023年7月～11月のまき網水揚量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、例年だと5月ごろから0歳魚の漁獲が始まる。0歳魚の来遊水準の予測は難しいが、太平洋系群の親魚量は横ばい、来遊してくるとされる東シナ海の親魚量は近年増加傾向にあり、2023年7月～12月の水揚量が前年と同等であることから0歳魚の来遊水準は前年並～上回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚と1歳魚が主体となる。中型まき網で2024年に1歳魚となる2023年級群の来遊が前年より多いことから、来遊量は前年並～上回ると予測される。

### (2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2023年1月～11月および7月～11月の漁獲は、前年を上回っており、近年の漁獲傾向および黒潮の離岸状況から、前年並～上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚～4歳魚（2023年級群～2020年級群）が漁獲の主体となる。今後も潮岬沖で黒潮が離岸傾向で推移すると予測されており、来遊および漁場形成条件は2018年～2023年と類似する可能性があるが、2023年と同じく来遊が少ないと考えられることから、前年並と予測される。

熊野灘では、1歳魚（15 cm～22 cm）が主体で、0歳魚（5 cm～12 cm）および2歳以上（22 cm以上）も混じる。2023年7月～11月の漁況から、まき網で漁獲される0歳魚（2023年級群）は前年を下回っていたことから、今期の漁獲主体となる1歳魚は前年を下回ると予測される。一方、1歳魚（2022年級群）の漁況は前年を上回っていたことから、今期の2歳以上は前年を上回ると予測される。以上総じて、来遊量は前年並～下回ると予測される。

### (3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚（2023年級群）が漁獲の主体となる。2005年～2022年の4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数と翌年1月～6月の1歳以上の漁獲尾数との間には正の関係がみられ、この関係式に2023年4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数を代入すると、2024年1月～6月の1歳魚の漁獲尾数は前年を大きく上回ると予測される。

西湘地区では、4月～6月を中心に1歳魚（2023年級群）が漁獲される。2023年下半年の0歳魚漁獲量は過去に類を見ないほどの豊漁であったことから、2024年上半年は前年を大きく上回ると予測される。

### (4) 房総～三陸海域等の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2023年7月～11月の漁獲量は2,639トン（TACシステム）と、低調であった前年同期202トンを大きく上回った。

仙台湾～三陸海域等では、宮城県の2023年7月～11月の漁獲量は519トンで前年並であった。岩手県の2023年7月～11月の定置網による漁獲量は77トンで前年を下回った。青森県では2023年7月～11月の八戸の漁獲量は3トンで前年を下回り、平館の定置網による漁獲量は14トンで前年並であった。

## マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

### 今後の見通し（2024年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、底びき網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）、  
4歳魚（2020年級群）、5歳魚（2019年級群）、6歳（2018年級群）以上。  
年初に加齢。魚体は尾叉長。

#### 1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは豊後水道南部西側では前年を下回り、豊後水道中南部東側では前年並。ゴマサバは北薩～薩南海域、日向灘では前年並、豊後水道南部では前年並～下回り、土佐湾では前年並。サバ類全体としては低調であった前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは豊後水道南部西側では27 cm～36 cm（2歳以上）主体、豊後水道中南部東側では20 cm～30 cm（1歳魚）主体。ゴマサバは北薩～薩南海域では25 cm～36 cm（1歳魚～3歳魚）主体、日向灘では27 cm～38 cm（3歳以上）主体、豊後水道南部では10 cm～30 cm（0歳魚～1歳魚）主体、土佐湾では31 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。

#### 2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは前年並。ゴマサバは低調であった前年並。マサバを主体とするサバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは25 cm～35 cm（1歳魚～3歳魚）主体、ゴマサバは27 cm～35 cm（1歳魚～3歳魚）主体。

#### 3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。サバ類全体としては低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは25 cm～40 cm（2歳以上）主体に20 cm～30 cm（1歳魚）も漁獲される。ゴマサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に漁獲される。

#### 4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年を下回る。6歳以上は前年を上回る。マサバ全体としては低調であった前年並。ゴマサバは前年を下回る。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期・漁場：マサバ、ゴマサバともに期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

(3) 魚体：マサバは27 cm～38 cm（4歳以上）主体に漁獲される。ゴマサバは28 cm～35 cm（3歳魚）および33 cm以上（4歳以上）主体に漁獲される。

#### 5. 犬吠埼沖～三陸海域（まき網、定置網、底びき網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年を下回る。6歳以上は前年を上回る。マサバはまき網では低調であった前年並、定置網、底びき網では前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては低調であった前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網では期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。三陸海域の定置網では1月、2月および4月以降に漁獲される。三陸海域の底びき網では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは、期を通じて22 cm～33 cm（3歳以下）主体に、1月、2月および4月以降は27 cm～39 cm（4歳以上）も漁獲される。

## 漁況の経過（2023年7月～11月）および見通し（2024年1月～6月）についての説明

### 1. 資源状態

#### 1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、加入量水準の極めて高い2013年級群の発生により2013年に急増した。その後、資源量は2014年をピークに減少傾向を示している。2013年級群の発生以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2018年級群（6歳魚）は、2023年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が103億尾と近年（2013～2022年）の平均（92億尾）程度の水準である。

2019年級群（5歳魚）は、推定加入量が39億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（4歳魚）は、推定加入量が77億尾と近年の平均程度の水準である。

2021年級群（3歳魚）は、推定加入量が130億尾と近年の平均を上回る水準である。

2022年級群（2歳魚）は、推定加入量が75億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）および再生産関係から、近年の平均を下回る水準と推定されている。

#### 2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2022年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2019年級群（5歳魚）は、2023年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が2.4億尾と近年の平均（3.8億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2020年級群（4歳魚）は、推定加入量が2.8億尾と近年の平均を下回る水準である。

2021年級群（3歳魚）は、推定加入量が1.9億尾と近年の平均を下回る水準である。

2022年級群（2歳魚）は、推定加入量が3.4億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

### 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

#### 1) マサバ

##### (1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。5歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。6歳魚（2018年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。ただし、成長および成熟の遅れがみられていることから、加入量水準から予測される来遊量よりも実際の来遊量は低くなる可能性がある。また、黒潮統流が三陸海域において北偏・接岸していることから魚群の南下が遅れており、少なくとも1月までは北偏・接岸が継続することが予測されている。これらのことを考慮するとマサバの来遊量は、犬吠埼以北のまき網では低調であった前年並、三陸海域の定置網、底びき網では前年並、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年並、紀伊水道外域、豊後水道中南部東側、薩南～北薩海域では前年並、豊後水道南部西側では前年を下回り、熊野灘では低水準となるなど、低調であった前年並となる海域が多い。

##### (2) 漁期・漁場、魚体

犬吠埼以北海域でのまき網漁業では、7～9月は八戸沖および鹿島灘～犬吠埼沖で漁獲がみられたが、漁模様は低調に推移した。10月は常磐南部海域～犬吠埼沖、11月は三陸北部海域～犬吠埼沖でややまとまった漁獲がみられた。道東沖では漁獲されなかった。7月～11月の漁獲量は、犬吠埼以北海域におけるまき網では1.1万トンと前年同期（0.6万トン）を上回り、千葉県以北の定置網・底びき網等では1.8万トンと前年同期（2.7万トン）を下回り、伊豆諸島以西の海域では2.7千トンと前年同期（5.9千トン）を下回った。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は以下のとおり。犬吠埼以北海域のまき網では、期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。期を通じて3歳以下が主体に漁獲され、1月、2月および4月以降は4歳以上も漁獲される。三陸海域の定置網では、1月、2月および4月以降に漁獲される。三陸海域の底びき網では期を通じて漁獲される。伊豆諸島周辺海域では、4歳以上が主体に漁獲される。漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路はA型で推移し、銭洲周辺、三宅島付近を流れると予測されている。期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、黒潮流路によって一時的に銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。紀伊水道外域および豊後水道南部ではマサバ主体の漁場形成もみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2023年級群）：26 cm以下、2歳魚（2022年級群）：21 cm～30 cm、3歳魚（2021年級群）：24 cm～33 cm、4歳魚（2020年級群）：27 cm～35 cm、5歳魚（2019年級群）：28 cm～35 cm、6歳（2018年級群）以上：31 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

## 2) ゴマサバ

### (1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は低調であった前年を上回る。3歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4歳（2020年級群）以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域、日向灘では前年並、豊後水道南部では好調であった前年並～下回り、土佐湾では前年並、紀伊水道外域では低調であった前年並、伊豆諸島周辺海域では前年を下回り、熊野灘では低水準、犬吠埼以北では混獲される程度となるなど、全体としては低水準となる。

### (2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域では1.4千トンと前年同期（7.9千トン）を下回り、熊野灘では1.2千トンと前年同期（0.9千トン）を上回り、伊豆諸島周辺海域では2.8千トンと前年同期（3.8千トン）を下回り、犬吠埼以北海域のまき網では5.4百トンと前年同期（5.9百トン）並、千葉県以北の定置網・底びき網等では7.0千トンと前年同期（4.3千トン）を上回った。

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～薩南海域では1歳魚～3歳魚主体、日向灘では3歳以上主体、豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では1歳魚～3歳魚主体、熊野灘では2歳以上主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では3歳以上主体に、期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、黒潮流路によって一時的に銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2023年級群）：30 cm以下、2歳魚（2022年級群）：24 cm～33 cm、3歳魚（2021年級群）：28 cm～37 cm、4歳魚（2020年級群）：33 cm～38 cm、5歳（2019年級群）以上：34 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産海洋研究センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
茨城県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
千葉県水産総合研究センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	
三重県水産研究所	